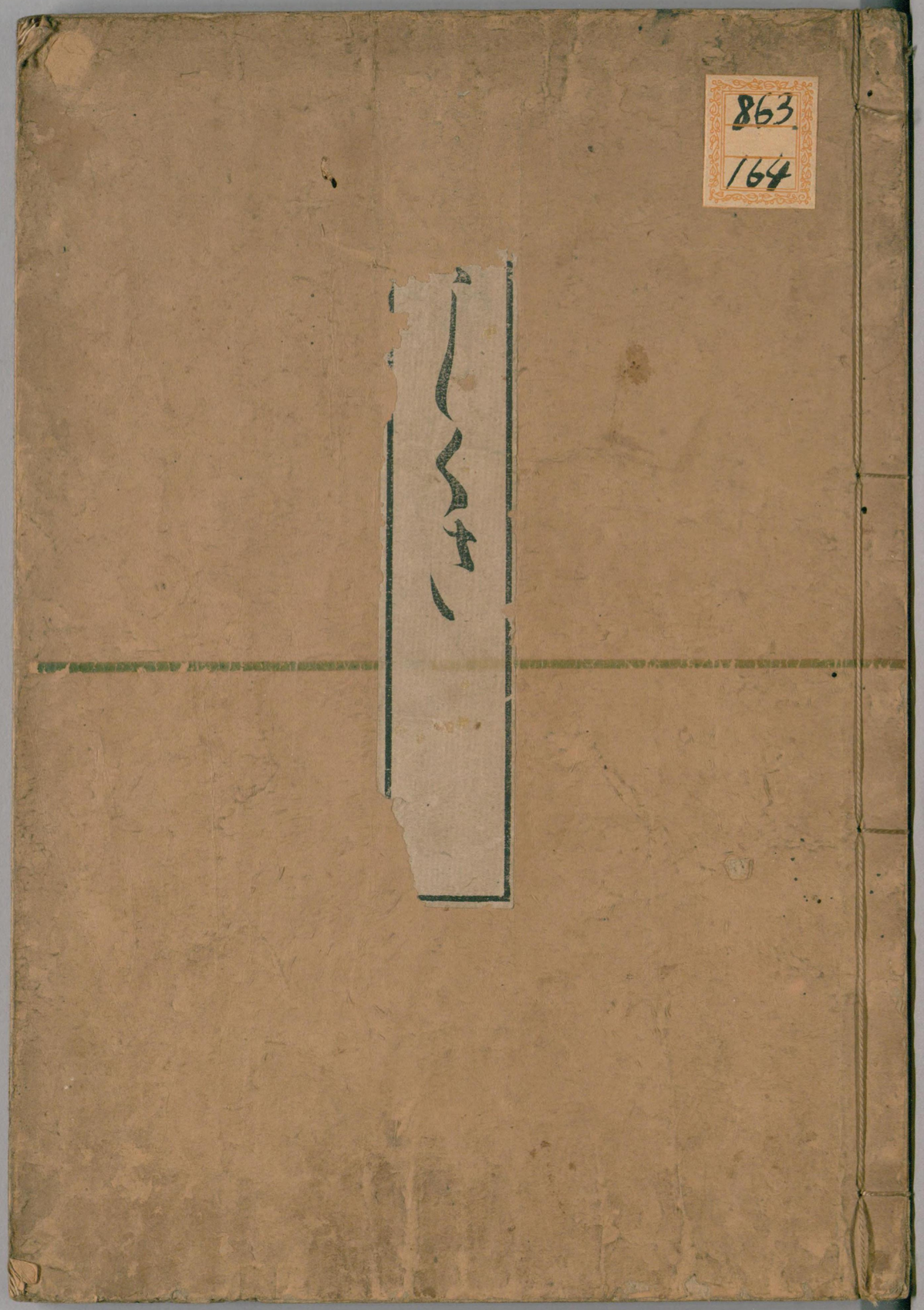
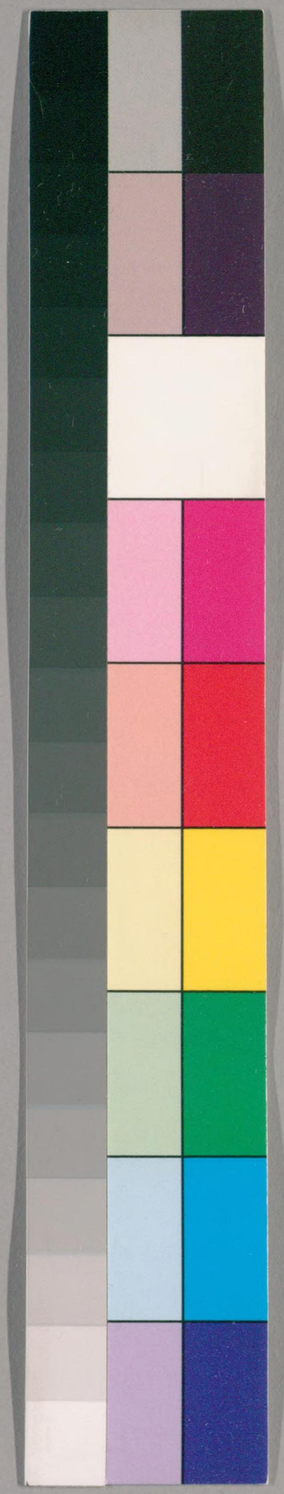
863
164





国立国会図書館　タイトル『名なし草』 請求記号 863-164

ガラス使用

八六三ー一六四

名なし草と題して元人
松兄ゟ乙撰を抄ける
書あるとし木犀居を
訪ふ日孝子竹屯いふ子を
家父乃莫逆孔友なる
故ゝ乃さしを次ゝ木の目也

国立国会図書館　タイトル『名なし草』 請求記号 863-164
ガラス使用

よとらふよりうゑ自写して
朱樹の翁に宇ゐひ侍るに
抄書なども其セリなるを名
ありて此れを申るしたまひぬ
文化六巳秋

青々阜池記
并
按

国立国会図書館

四国社鼻をしらせ富士乃山　岳輅
五日乃風ゝ十日の雨　松兄
粽申に月をすれ尓巻あけて　士朗
あや兎の水を淀と見る面く　輅
琴持る心数尓朱ぬらん　兄
人尓なれたる鶴ありにやる　朗

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164
ガラス使用

春秋風ハ誰くそ　輅
明行眉ハ出る梅ヶ香　兄
小萩津む畦辺ハ小門の尺ゆるし　朗
とにもかくにも湖のさゝしき　輅
有てなきうきをみとて泣やらん　兄
月ハ宮らこを弥す雪掃　朗
青むしら起て尺れた拾葉　輅
河け田の幣をたゝふ星淡　兄

八十ハなりを年をかくしたる星　朗
立てへ星峰雉子ハ矢を折　輅
大川花孫深山景をほらん　兄
酩茎乃口をあけるタヽル　朗
野田幌志この野田ハ家来て　輅
二重のきぬ子津む張笠　兄
松ヶ丘孫笹の青葉を打たらひ　朗
廉子ゆくらの大百合を賣　輅

五百年幸能めて度佛を　兄
温泉のほふまに移まて来る　朗
山駕籠の庭のぬけたる暝て　輅
雨は秋木の葉簾あり　兄
其起のし海人も彼をひるこゝし　朗
出雲乃神のとしよ里ハ誰　輅
妹風の月吹起す笑ふらら　兄
々宵を鹿にまゝかりて寐ん　朗

鐘つくや坂乃彼岸の明日ハなき　輅
黍穂粟穂を荷ふ里人　兄
川音にまゝむ小鷺を引まゝて　朗
筑紫秋方をあらはす白雲　輅
志ゝ雲の花なきほの朝なし　兄
衾負ひて出るきちらき　朗

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164
ガラス使用

月と日新聞に澄ふ長の山　士朗

雪乃白ひに明る秋の夜　岳輅

菓桔梗尾むを庵の窓まで　松兄

襟　見ふたり志川かなりたる　朗

五人扶持我のふ付たる牛の声　輅

竹新口の菓の宣きむら雨　兄

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164
ガラス使用

うそはいてとつて出たれは忘草　朗
都を西に無くり水うこ　輅
翁手爰社淳橋崩されて　兄
君ゟ記念の小枕しられ降　朗
念仏尓柏子ゟ生てあり花也　輅
いろは教へる神淑乃一ツ家　兄
黒犬の喧嘩止ける昼の月　朗
芒ハ雪にあらりれ手ゟ　輅

童陽乃酒に白髪の色まして　兄
四川になる子に琴をひかせる　朗
鼓来るを盛ともアん芳の浪　輅
霞に むせる古寿の春　兄
寄よめと小倉の娃追ぶり　朗
國ゟ下向のあくる日の雨　輅
百姓乃斬ゟ二丁吟申ぶり　兄
呼子あとなき榿の夏く　朗

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164
ガラス使用

嵐吹西院祭月くらし　輅
袂のうちに棋子つゝふるく　兄
腰すけのやうな蓋芝をさゝみ出　朗
菫に又鳴山おとしきす　輅
水無月も峯に雲たく夕まで　兄
夏まへる和歌の浦浪　朗
舞ひる蜘に紅生てやり　輅
格社茂に墨る園の戸　兄

日の新に羽紙洗ふてたゝふらん　朗
神のあらハ毛呆なりけり　輅
四十に二ツたらても花の友　兄
故蝶おもに拙る菓苗　朗
又あらに月繼ひる春の水　輅
侘に見ひてそ侘寐するこのも　兄

松もふあとの世にきえけり不二の山　松兄

鮑燒けふる海をこゝに来て　士朗

海百てとめて鳥やらの柿のむ　岳輅

むし月はいりの宵くの月　兄

鶏の箱けふといふ日は靜也　朗

かゝこゝに捨て前り腰こけ　輅

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164
ガラス使用

松風にまゝ住としと吟やらん　兄
久ら里くと育つ所る社子　朗
鳴神社居て鳴をゆさくつけ　輅
法先女中の幾むれも来る　兄
学むらに投る舞を踏まくし　朗
恋の和慶する朝息の花　輅
夜明乃ひりを贈の羽にあけて　兄
水きり流す秋乃山　君　朗

追くにより里て蓋とる飯の泡　輅
掾ふゝありく寺の私家　兄
大木と浮めそやしたる茶喰て　朗
蟇と面をなれ春の日　輅
常に水一すくひむすひあけ　兄
人をまゝせて投引をぬく　朗
あられ降水見乃莖市ゑにけり　輅
粥の行方をこゝに拾芦　兄

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164　ガラス使用

紅塚ハ眠る弓もあれまて　朗
月ゟ出たら泣ワのれせん　輅
きりくは蛩ハ行時箕ハ三時　兄
茶の木乃上ハ雪雨とある　朗
腥く魚を飢ひすゐしてほ此と行　輅
志賀の男をさそふ釣竿　兄
鳥めゟ鹿の板を踏あるし　朗
師走廿日のたゝり雪の出　輅

夢かゝ里おほやさ餅をたやすあり　兄
牛無し無る咄なくある　朗
笑ふならワらく嵐のはしこ賣　輅
雪腥を北へ山吹のけく　兄
塗箸社膳さらきする花畢　朗
褂もめさぬ蝶多の呪　輅

あけぼの花より上にこのもなし　角杖
月と花と志つまりこへる枳実ゆ　雄渕
月を待枳はむつましき風情ゆ　碁屋
老木よりも人の捨てる此くらこの事　松兄
このいとぬ花に對して小言ゆ　、
との花待ちるとも見てはなまうり　長祢

国立国会図書館　タイトル『名なし草』 請求記号 863-164
ガラス使用

輪にさりや梅にもひとつ引かける　みち彦
梅さくや年くふへる蛩の穴　椿堂
捨てまた住こくありぬ彩の梅　玉屑
小供等の一封ろ居て梅のお　木海
孫しな花てもなくて穴女のお　竹弥
門ちくしてもはなよ梅乃お　松兄
牛馬に正月させてうめの花　丶
朝白や伏見やしなの彩尾　茂良

あさうあの遠山色に咲まなり　菓居
朝白に年孫ふけしき雀ぶ　松兄
松ひ捨し草のおんて立りなり　かつ女

小座孫菓を高白の殿こは
黄の花と名つけていとちひ
さうわりはるを書ふ此ほとは
やく大きうなりたまへともおひとつ
為にさ我いてたまけは咲いて
たまはは咲まえやきらんつまえ
すてんとおとろあして
咲出よ芸を今年の菓社を

あくまでもしたくまともとに
あくに咲出たまつ也

さあらとも君の日なれたる手折分　士朗

花は年くに盛あり人は一代年
一度のさかりあまて年くに年
年のよる身こそあなしけれ

あやかりに来くそよ花に又今年　松兄

をれはすれするほとおりあへに　、

月花のあさりをのや池の亀　、

ちと社君も世にくまれす花の張　米彦

花さかりて年くらぬる人の新　亜溪

右斎吉に傘はもとしぬ山桜　岱呂

ともあへも浮世は花にまかせ風し　旭亭

花にあらぬ鳥社心そうらやまし　松夢鈹

たること見れた樗の花のまゝ　魯隠

竹樹に新風志める葛蒲に　百堂

訪隠者

住うへて世をタ息のあの門　鹿野

伊賀の國に住ける僧の常に
一食ばかりくらへなく人の秋雨時に
おりてまゐるのことまて三日を
そすくされたるある人の討ひて
いふ此庵ハ四方大河にして大水の
日ハ何をかたへさもたまひけると
いへは尋常のことのなり食物の
なうりしといふ日ハ御ほうすとそ
あたへられたる思ふに十日廿日手
なれる生れ子の呂口をおきを此を
冊ニ此を志りて乳房をあたふ
生れ出る時よりなんそ志ひてる

食物をむさほらんやあたりまう
せば世なりけり
口明てるを此を月日をむまゐる　松兄
ひさ見れた心志ひけし山さくら　宮巴
ふへるさを悪癖にハ志たり山　樣　吐丈
旅のこの十日もくへも垂さ久良　羅漆
夕白ひや実入らぬあのこけくな　石毛
香を踏て菓に抱とろく山路ゆ　月居
白けしのちるや部隊の一重垣　烏翠

菜むしやおくまもひとり仙の花　慈亭
佛生れて十日もたゝぬ事しのむ　松兄
菜の花や昼ゆらゆる蓴　六唐
なのむのかさなる山ハ皆丸し　珉上
志青な菜の葉の中や梅のむ　松兄
梅咲て身ゆ木からしを忘れり　、
菜ゆ水の見ぬ深世や宮女のむ　、
神主乃癒て梅を見や花の奥　汝菜

れく山ハ何ゝ降やら重さくら　来耙
はまえてもく花乃すゝれ坤　天老
腰乃法螺董はむまハむつゝしき　乙二
与し壁西行庵ゆうり
月むゆ卯ゆ花なき房ゆ　松兄
花小出て抱へむらの佛達　、
手打日もなくてちり金山撰　、
老井ゆうり

此水に捨ひ行ふ山さくら　志ゝ女
ちらくとすゝ原や芒ハ枳乃母の　紆云
花芒あれらをいたゝ風の秋　墨山
此ところやすることなほ菓のを　艸龍
志ゝ我久や木綿の虫の這ひ事　漫々
白菓を先折ふ風情ゝ　松兄
里の子ゝ菊荊なり九日ゝ　、
鶯の実を撰きりて

此実ハ柄ゝなくてハ通られす　、
山吹に委すゝ申るゝ房ゝ　、
大黒天ハ米一石に遊一本　行
たれの家に住むたまふ今の世の人も
いふ通らぬ事のなら金を両死ぬ
事のならずひとりと通らさるゝ事や
さすあれそ諫の福人なるべき
月花に可ゝるゝ拒ふ焉ゝ　、
花の上にむありたれのあゞし山　亀梁
菜の花や枝にすゝる猿の面　金谷

拓尾苑 家 腮のたゆのしまの 琪六

鶯の鳥 章に入れしかなはねの 宇洋

うつ禾に橋多き小里の礼 菖三

鶯の乃小袖つくらん 仏ふくろ 吾友

宇久ひすの月枕といはん 朝朗 松菊

鳥の巣をちりと呼こそ恐なれ 了國

燕来て明けたらんる草鞋の 孔阜

子雀の人にあつくそ 氣なる 大阜

おとなすくなきこそ安なれ
喜撰の家ハ世を宇治山のうく
のことときけたよくあはしらる時鳥も
年に稀なる鳥なれた一声を呼て
たに耳に残りて常にもワすれす

浦 山鶯の笑ふら出るなときは 松兄

夜明の返るかしたよ 子 紀 、

松に月胃くおされなときす 、

立ちは遠山雲や宮とときす 雲常

旅人ハ何か石見そ時ある　黄山
時ある新ハ澎水の月枳ゟ　祖風
ゆとゝきれ神淑乃諸ハ人もつく　左雀
己か身ゟ縄引おとふあゝ鶏ゟ　八千坊
雀ゟも来てハ異ある板屋ゟ　三津人
鶯ハ留主よと掛ゟ　時ゟ雀　方明
うゝ禾すの宿ある花の小家ゟ　馮月
家庵や鶯五ツ鍋ひとり　野秀

うゝひすか蕃するかんよ餅の上　曰人
鶯かさとしも雨に付て来る　松兄
雛子ゟ尾のなくれ来るや三笠山　、
生弱ゟ月ゟされ也あけ雲雀　、
棟あけゟあけ合て時雲雀かな　翠川
枳明ゟら服ふらして稲まくめ　五来
水ある社ゟてまりゟ行　草の中　鞍風
かんこある豆ハ二葉にまりゟ　其白

宋呼鳥なかぬうちのら鶴なり　竹堂
孫六り右刀うり音や宋呼鳥　松兄
青松葉身に立やうに呼千鳥　、
多度山の雲らきれ行鴨の声　五雄
水鳥ハ鼻もひらきや鳴の海　阜池

元日ハうれし二日ハ面白し　丈左
君をて我柳を志てく往来ゆ　古猿

春我海人にまし里てなく鴨　圃暁

人日

老ぬれを上手に喰ぬ芹菜　素葉
元日や先うれしなひのし山　松兄
蓬葉に苔むれ宿の月日ゆ　、
青柳を水にうれさハ何小町　、
鶯をも又無しかれ猫の恋　、
菽入や鶏白鶏赤の簾提ゆ　、

たる風や伊吹尺よとて起さるゝ　増國
この口ずさしてはしろや春の風　竹有
春雨や子をかりに来る岸の垣　文角
幾枚手あれも入れり洗浴し雨　其映
あに春も言葉多きハ青のうち　天女
やく持久の扇のさせる私かまる　一元
嫁なとハ年よりくさし笹粽　左節
衣ゑへ短しと母の口ひ沙　松兄

さゝふれや糊のぬけたる人の皇　、
あつ夜日や折く払ふ足袋砂　、
蟬なくや子供の蔵は刺の苔　吐山
江戸岸や傘さしかけし夏笠　巣兆
鐘もこの鐘なくもこれ五月雨　花叔
人の扇中のしと思ふ折もあり　冥々
永き日の汐やとこ陽て隅田川　玉之
行春に物見つかなさよ枕汁　珉屋

鎌にあれ月になきとて田打ゆ　松兄
老ゆるを得さしものを真の水　、
鳥買ふ子供ゆる霞ゆ　、

四条納涼

かれて月山あれはとそ夕すゝ　河洲
雲かれて不破の冥家を通ひり　世竹
萩の風仏ハ何と呼たまふ　硯翁
旅人ハ萩芒より衣し　田禾

萩の春風の中より呼へひり　百磯
森よりすれは梅日とより出の声　立寅
掃深とれ雲か降ありたく山家　蓑亭
箒木の花咲まひり今朝の蜘　松兄
たつ秋やきれてさひしき蟻の花　、
念仏も尾さそは伊き砧の事　、
笠星ゆあらさゐまもあらひり　可鼇里
朝雪や焚ゆろしたる飯の上　柳荘

冥川社橋にて望たり舩の風　曉浦

丁卯七月新屋梅花園の主人
五老をむかへ其齢をしとふく
五老とは朱樹乃士郎白首乃
羅堞一白井の桂五尾足の岳軺
花癖乃少泄なり孫につゝなる
人は鹿野天老菖井大蘿五尾
五雄乃徒しむの日の賀筵に望田の
早稲社いまゝ屋も喰さるを童孫乃
雲の帯に洗ひ不二の雪なし雅志
花乃をくしらけて蓮の葉を清漣に
濯てあれをぼくむ酒は伊丹の白菓
いせの海の小海老を蓮葉山寄の蓮に

のせてそ出されける五老の義孫乃
家に老をワす紀園中の月に鍛れて
玉母ゟ極に酔るうちしあら面白の
ふのおもひやく筆をとつて木屋居
雲兄記之

年とる里は皆家父よ五月の里　松兄

七夕は茅花の枕なり　、

七夕やほとやし並ふ雲の鷺　、

旅に立日もあれをこそ蟬の声　万和

夜の枕はあてにもあらん山の上　眉山

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164　ガラス使用

たまつ笠ひよろくと行はいとり　外亭
川舟ぞ捨て雨て来たり笑菜摘　祥禾
籠のつゝ菜何ほともなや雪消る　奇渕
すゐるなら京乃てすゐれ其の雨　松兄
如月や寺を見るなら京のうち　、
手雨くら此以来にけり涅槃像　、
志川のさやつゝ草見ゆる砂の中　蕉雨
すけろふや松葉てはらん貝の口　東陽

其雨やうゐくし見ゆる傘の新　梅間
粉田の橋すけのふるを見えす
橋なほす埃も霞む遊ぶ　松兄
猿沢乃池の色にて
宮しろむく宮に飛つく帷かな　、
抄天拿もよりて祝えんの月松ぶ　、
菜抄子もすゐむといふか山の家　梅吏
たる雨ぞ松を行す猫のわらうぶ　李東

夕くれにさくくれもなき彼岸が　李臺
おのらしが吹とも雲ハ松の風　周瑞
おのらしに帰りむけて月牛の角　桐栖
桐火桶一枚嵐のこのふりたる　有斐
小隅のら降出すこのうの冬の雨　芳元
人間もこのらひ時也冬こゝ里　秋風
仏にハ三節たゝぬう御ことなし　砂文
をとるなら正月抱やれ沐叩　松兄

祖父要ゝ就白髪光りて冬の雨　、
庭ひかりまるや湖水の春の入　、
れとゆるゝ居茶もたくて雪の朝　、
田金とてさりとハ雪の降るし　稲渕
古紙子名を小狐と付にけり　菓巴
裏ハなとくるゝ蝶の祢むる間に　椎己
蝶舞や以新一把も門ふたけ　朱鼎
門なとにより子持ひり几巾　左琴

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164　ガラス使用

住の江ハ岸に浪なき餘ならず　布舟

金谷を先達として同行三人
旅立日ハ六月十五日なり

見ゆきこのすいたきる旅の涼の中　松兄

朝夕ハ煙すしき山家ぢ　、

一　雅秀亭に立ちて画行師の
首途なれば例の外筆とて
出して傀儡乃抄にしさを書そむ

旅人ハ足のぐしひや蟬の声　、

実にて此艸の町中の山といへれ

なるに　なるひとす

町中ハ山にもたれて涼の中　、

清水より上に何るや松の声　鸞岡

夕立ハ秋ぐる風る旅の家　冥嘆

申にたちや燈火揺てすれ出し　武陵

行もとる蟻何るかたのしひとす　浦旦

月に鹿鮒に不足ハあらえこそ　艸人

茶つきハ来ぬ日や庭のきりくす　雅喬

秋よ子よ月よ嵩と呼る引　九岳

なふハ是にして我のふハ非やとくに
笑くさる起卯ハ月起に昼秋を
口ゆるされと雪深ときなに衣かへて
筆禾の境界に住すひとり志くん
ひとり詠してといへる長明か言葉を
捨て岩に蕉蕉の涎を称ふる
よ紀人の志似して なふも秋の義　松兄

大原女孫足のたやさと夕和葉　、

秋の身れ却毋しろ仏れを面白し　、

月の出かあまりたやはて蝶のかれ　、

行秋やとこを終の珠数の粒　、

伸久蝶のあとを埋むか滝の音　橘良

なふといふ日もなくなりて雪の義る　喜年

行年や色く来る火打石　如毛

ゆくとしや人のかれる豆腐串　帝言

世にくりもいくりくて忍る川きのふ
なふとも終に行水南むあとく仏と
稱世志たまふ康甫老人の追慕の
序にまゐられて

神時雨君ら仏にたる日ゆ　松兄

たつしられさるに松ハ数なり　素月
油賞へ塩賞へと降時ゐる　松兄
就宮社白鑾よりは生海氣ゐ　、
雪くといへた一日雪かふる　如高
おこのらしの夜のふまハ似ぬ松明ゐ　大蘇
おこしらき枝折そへて榾火かな　春河
山炭の香やかふも出て見る神活山　不卜
清澄の水奇麗しとしの暮　松兄

老となる年ごろもなくて年暮ぬ　、
日々の米の飯ハ一生味をしたれ
菓飯赤豆飯の色ゑくるハ一生
味あつも月ハ雪にはしきをつくり
花ハ風に風情を尽ハ不二の山を
常住不変にして雪ハふりつくと
いそれくるそ　そるすき
米白し豆腐も白し不盡の山　、
鶴ハ好よ亀ハ虱よふしの山　少沙
煤掃て仕上ゑ日との山家ゐ　菖井
大仏の鼻のうしろ煤をくひ　松兄

緑牛園餘千秋の賀筵に招れて

年も名も涼しきかしくなりこと　松兄

名月はとこのゝ出てもたるゝ也　桂五

松嵩やも食志そめて秋の月　空河

いふといふ月に淋しな仏のもゝ　芾梅

此ところ秋雨さらしなりいふの月　松兄

山雲の古きすこそたるの月　穆貢

垣ましにたるや留秋たゞの月　嵐外

春秋月木のたれてのこそたゆるが　松兄

寒月や馬かるよふ川むこひ　一艸

月よしと名乗てぬすむ飄が　一尼

櫻の実はいつ乃て落る月の秋　外央

とこのくして称られぬものは月よが　壺泊

四つ辻や四五人立し二百の月　松兄

あけこのゝや眉に零れくいふの月　文暁

松の葉のおそきひまより冷の月　其朱
其の月門田の屋もひゆる也　千當
鳴るハ急てこそあれ朝の月　湖風
思ふるさつたり捨て不ゆの月　波月廉
戸口にあら芦の浪花や冬の月　蒼札
湖北水こくよりてふゆの月　五道
月早し五尺の芦の無くてより　羽南
夏かけの流るをとんよ夜の月　儲史

葉のあ乃ひと川咲出て冷ふの月　加ゝ女
月ハよ程のあれたこそ雨の月　大商
山を出て四五尺月のさかりに　何堞
何ゆへに人ハたしるそ冬の月　桂聞
なまゆへに初笠ならそ不ゆの月　松兄
名月や砂のあゆゑのたてしあき　岳輅
春北月むかしうんへて急し　樗堂

世を捨ぶ歩行さらの山路ぢ　士朗
花ぞ音するとくくの水　松兄
雪鶯鳥乃はをさにみとりて　岳輅
家ハ古風の新ひくき月　朗
狩狸桶ぶ菜の白ひやるらん　兄
燭焼ひとり作てたまやる　洛

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164
ガラス使用

搖衣呉雲の垢を身に俺て　阜池
酒は三笠の山にけをくむ　五雄
木のらしの中に押合ふみそさぬ　蕉雨
霜ぞむくらの春ゝにかし　秋柔
あらけなき岩に繪襦税にけて　朗
宇佐乃夷のふの姫火を活　兄
学笛のあなうきんを根つく　貉
五月の山に洗ふくろ髪　池

龍嘯竹ぞ柱乃能ほらけ　雄
苔のむしたる石をはまゝ　雨
柿ぞむ赤いとたり手折きて　柔
真の月枳のありたる　朗
鴨こへる物田の町家の遠の声　兄
五百年夏をうまし山伏　貉
学の上にかさる奥足のちきれたる　池
人立りける紫陽の顔　雄

国立国会図書館　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164　ガラス使用

打ふれ指を琴柱にたさまれて　雨
むら雨といふ香をたきつく　柔
山吹ハ秋の蝶とや化しぬらん　朗
いとゝの本そきタくれの月　兄
朝臭鮎法門芒に押ひらき　洛
催ハ捨てる汐やなころも　池
茶の煙ちりなきさにつるや　雄
松さひこへる酒折のこゑ　雨

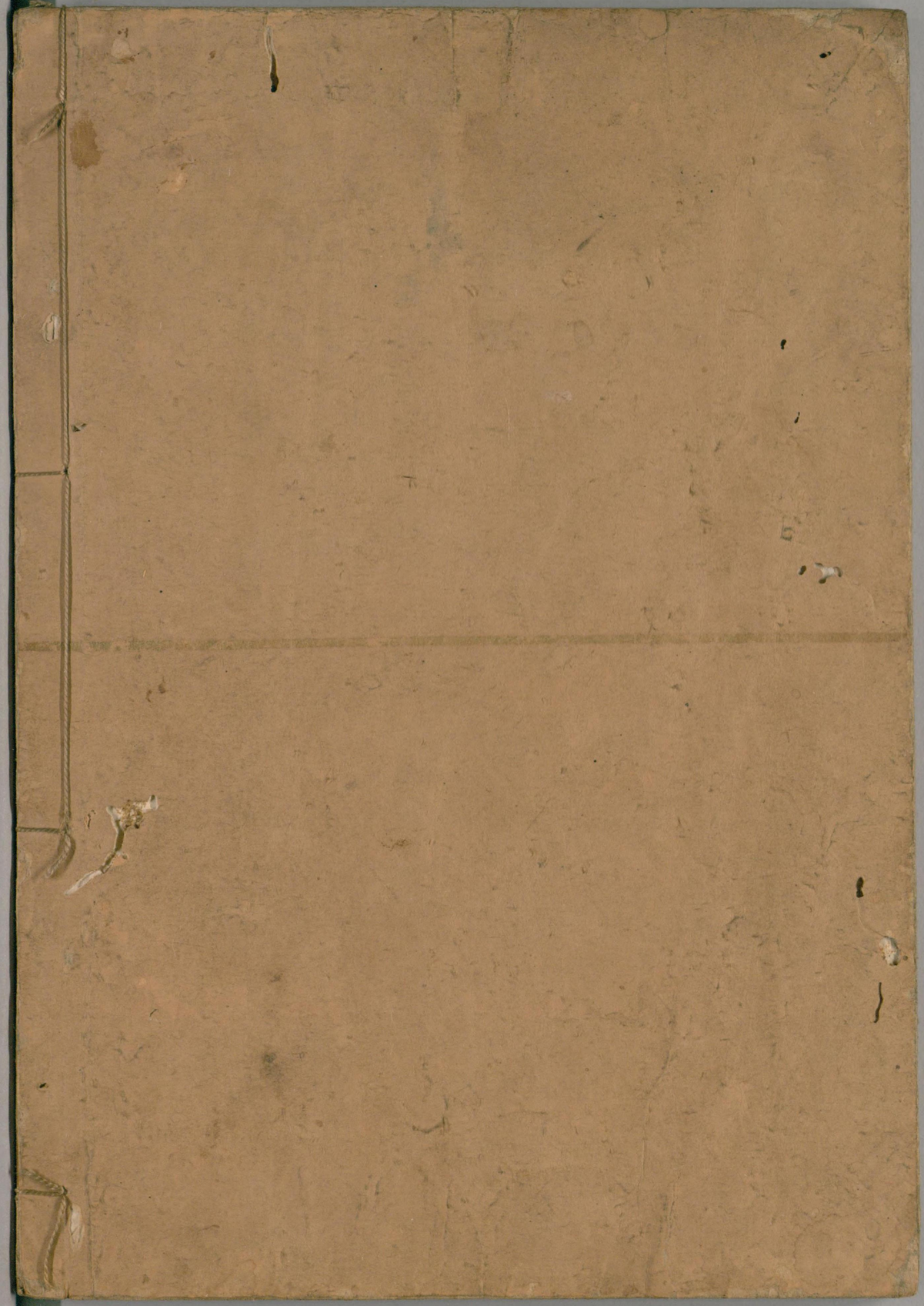
ゆ結ひしとられて猿を追ふり　柔
日和のよさに田乗をやく　朗
志ゆかなりと見やれを水の蒼き　兄
青きこの皆青柳にしてす　洛
たゆむこのさけを鳥も焼しつり　池
おたらに并ふこのけろふの唐　雄

863
164

14266

文化六年
巳春三月

国立国会図書館　タイトル『名なし草』 請求記号 863-164　ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『名なし草』　請求記号 863-164

ガラス使用